グリーン交悠録

ゴルフから学んだ「粋と野暮」
19番ホールのよもやま話に感動

財界通信社（本誌）社長 **大中 吉一**
聞き手　ユーニス社長 **兵藤 大輔**氏

小金井カントリー倶楽部

病床で振り返る我が人生と偶然重なる運命

兵頭　最近また大病して入院されたと伺いましたが、その後いかがですか。

大中　ご心配をおかけしましたが、今はすっかり快復しました。昨年私が病床に伏している時にも、貴方がピンチヒッターとして、私のグリーン交悠録のインタビューを引き受けてくれましたね。感謝しています。

兵頭　いえいえ、どういたしまして。長い付き合いですから。

大中　私は年間120ラウンド、通算45年という話をしましたが、健康については余り触れませんでしたね。

兵頭　そうですね、では、今回は、健康談義から進めましょうか。

大中　昨年の2月26日、小紙は創刊50周年を迎えましたが、その後、心筋梗塞、脳梗塞を発症し、今回再入院して初めて我が半生を振り返ってみました。

兵頭　大中さんは体格もいいですし、確か高校時代は甲子園を目指していたとお聞きしていますが。

大中　そうなんです。でも大学入試を目指そうと言う18歳の時に、肺結核を患ってしまいましてね。1960年代半ばの話です。当時、結核は「不治の病」というイメージが根強く、私も「人生もこれで終わりかな」と思ったほどです。しかし、ストレプトマイシンという特効薬のお蔭で復活しました。

兵頭　それは知りませんでした。ところで、快復後は。

大中　その後は、大学入学を諦め、代わりにビジネス誌創刊を目指し、アルバイトをしながら資金とノウハウを蓄えました。最初は「財界公論」と名乗っていましたが、すでに大先輩の三鬼陽之助さんが発行する「財界」があったので、15年後に「月刊公論」に変更しました。

兵頭　「公論」という名称にこだわったのはなぜですか。

大中　五箇条の御誓文の第一条に掲げられている「万機公論に決すべし」、つまり政治は世論に従って行なうべき、と言う言葉が胸に沁みたからです。

兵頭　ところで、何のアルバイトをしていたんですか。

大中　「産経ジャーナル」という雑誌が募集していたので、8カ月の入院生活の後、応募したわけです。

兵頭　これが、大中さんと出版業との出会い、というわけですか。

大中　ええ、出版業は素晴らしいと思いました。約8カ月続けて、是非とも自分の力で出版社を立ち上げたい、と一念発起したんです。

兵頭　20歳そこそこの青年がビジネス誌を立ち上げるなんて凄いですね。

大中　私も、まさか50年も続くとは思いませんでしたよ（笑）。しかしこれもひとえに、応援してくださった方々、そして読者の皆様のお蔭です。中でも特に叱咤激励して下さったのが細川隆元先生で、創刊後間もなく対談していただきました。加えて、伊藤忠商事会長の瀬島龍三さんにも公私共に大変お世話になり、更に、朝日新聞の三浦甲子二さんにも、とても面倒を見て頂きました。この御三方は私の人生の師です。

兵頭　非常に素晴らしい師匠に出会えたんですね。御三方に巡り合っていなければ、大中さんの雑誌ははとっくに廃刊していたのでは（笑）。

大中　仰る通りです（笑）。

兵頭　ところで、三菱重工爆破事件でも、大中さんは、あわや死に掛けたと、以前聞きましたが。

大中　健康とは無関係ですが、偶然が重なって命拾いしました。忘れもしません、1974年8月30日です。

三菱重工のある役員と1時に同社入り口で会う約束だったのですが、渋谷での用事に手間取り、慌ててタクシーで向かうと、六本木辺りで運転手さんが「今、ラジオで三菱重工が爆破されたと言ってますが」と言うんです。12時40分頃です。急ぎ現地に向かうと、まだ警察のロープが張られる前で、辺りは阿鼻叫喚の光景でした。通常約束の時間より早めを心掛けていたので、もし用事がスムーズに運んでいたら、あの世に行っていたでしょうね。

兵頭 まさに運命ですね。

大中 実は、約10年後にまた同じ様な事が起きたんですよ。1985年8月12日のJAL123便墜落事故、「御巣鷹山事故」です。ちょうど12日からお盆休みで、大阪の自宅へこの便で帰ろう予約していたのですが、三井銀行の徳松社長のインタビューがその日の夕方に取れ、逃すと年内は無理、ということで、予約を前々日にキャンセルしたんです。結核、三菱重工、そして御巣鷹山事故と、私は3度死から逃れたのです。

兵頭 強運ですね。

大中 その後、10年前にはS字結腸ガンになり、虎の門病院の秋山洋先生という名医に治していただき、昨年心筋梗塞と脳梗塞を発症したものの、これも快復して今に至るわけです。

素晴らしい紳士達との出会い

兵頭 そうですか。ところで大中さんとゴルフとの出会いは。

大中 創刊3年目の頃、仲間と徹夜マージャンをしていた時、ゴルフをしていた他の3人から誘われて、軽い気持ちで行ったのが最初です。

兵頭 でも、少しは練習したでしょ。

大中 いいえ、甲子園を目指していた野球少年でしたから、止まっているボールを打つスポーツに興味はありませんでしたね。

兵頭 しかし、大中さんらしいですね（笑）。

大中 正直、ゴルフをバカにしていたんです。当日、5番アイアンを借りて振ったら、ものの見事に空振りしました。何度振っても、なかなか当たらず、「ゴルフって難しいんだなあ」と、ここでようやく悟ったわけです。

兵頭 そうでしょうね（笑）。再びクラブを握ったのはいつ頃ですか。

大中 数年後、メンバーも恐らくその友人達で、私にとって、この時が初ラウンドと言えるのでしょうね。

兵頭 気になるスコアは。

大中 実は数えていないと言うか、数えられないほど酷かったのです。

兵頭 惨憺たるデビューだったんですね。では、ゴルフを愛するようになったきっかけは。

大中 その後しばらくして、紀文食品の会長兼社長・保芦將人さんに、名門の小金井子カントリー倶楽部に誘われた時でしょうか。ゴルフ場に集う人は皆エスタブリッシュメントで、紳士で、服装のチェックも厳しく、「マナーで始まり、マナーで終わる」というのも、保芦さんから学びました。ちなみに保芦さんは、伝説のプロゴルファー、中部銀次郎さんのジュニアの記録を次々に破った程の腕前で、今でも「月刊公論」を応援してくれています。

兵頭 素晴らしい方なんですね。

大中 現在キッコーマンの名誉会長である茂木友三郎さんにも、いろいろとご指南いただきました。

兵頭 茂木さんとの出会いは。

大中 細川先生の対談に、友三郎さんのお父上の茂木賢三郎さんが出演された際、「たまには千葉カントリークラブの梅郷コースにでも行こうじゃないか」ということになったのです。この時細川先生が、「君も来い」と仰って、ご一緒させていただき、当日、そこに友三郎さんの姿もあったのです。この時のスコアも残念ながら覚えていません（笑）。細川先生の素晴らしい朝のひと言、ランチ、そして、19番ホールでのよもやま話を聞いて、「これがゴルフかあ」と感動したのを覚えています。素晴らしい人達と出会い、興味深い話を聞き、そしてマナーを身に着ける。ゴルフは人生の肥やしとなり、もちろんストレスも発散できる。こんな素晴らしいスポーツは他にはありません。

兵頭 全くそのとおりですね。

大中 その時から、友三郎さんとは「我がゴルフ交悠録」というコンペをスタートさせ、春、秋の年2回、それぞれが紹介したい知人を毎回1人誘って、今年で46年目です。

兵頭 いい企画ですね。

大中 ゴルフを通じて、私は「紳士」と「粋と野暮」を教わりました。そしてこれからも、体が続く限り、コースに出かけるつもりです。

兵頭 またご一緒しましょう、有難うございました。